

中国・上海 モモ事情

森谷 修

Osamu Moriya

昨年11月と今年の3月の2度にわたって中国上海市にモモ栽培の指導に出かけた。

キッカケは、昨年6月に上海市南^{ナンフイ}匯区の区長一行が山梨を訪れた際、果樹農家の技術水準の高さに感銘して、「どうしても山梨の果樹技術を直接教示して欲しい」との強い要請を受けた。案内役の農業高校のK校長が、簡単な気持ちで「ハイ、おまかせ下さい」と即答したことから始まった。私もその巻き添えをくらったわけである。

上海市は人口が1,600万人の巨大都市である。南匯区はその上海市を構成する行政単位として存在する。人口はちょっとした県並みの130万人を有し、上海市街の南東部に位置する地域で、限りなく平坦な田園風景が広がる田舎町である。モモづくりの歴史は、なんていっても桃のルーツ「上海水蜜桃」の原産地であることから太古の時代から栽培され、今日まで営々と続いている。モモは彼等にとって自慢のオリジナルフルーツである。

さて、その南匯区に出向く指導メンバーを紹介したい。まず事の発端となったK校長。今年3月に定年退職された農業教育者で、自家ではオウトウとモモを作る大農家でもある。2人目はNさん。県立農業大学校長を最後に昨年定年退職した農業技術者で、専門は野菜と土壌肥料である。3人目はSさん。果樹の専門技術は皆無に等しいが、メンバー4人の中では最も中国通で、相手方との連絡調整、情報収集、旅行手続き等、主に事務方をこなしている。4人目が、私である。若い時分から長らく果樹の普及員、途中で専門技術員、50才半ばで県果樹試験場長を務めた経歴の持ち主で、

昨年3月に定年退職となり、現在は、オウトウとブドウづくりに汗を流す専業農家であります。

4人のメンバーが第1回目の指導となった平成19年11月24日、上海の浦東空港に降り立ち、出国カウンターを出ると、南匯区の対外経済委員会のお役人が待ちかまえており、なんとメンバー全員に花束の贈呈を受ける程の熱烈歓迎にいささか恐縮した次第であった。このことは、想像以上に我々に期待するもの大きさを実感すると同時に責任の重さも感じさせられた。

本題の上海のモモである。2日目の11月25日、モモ栽培の現地を見て、その樹の姿にビックリ仰天。樹齢が10年以上になっても、樹の高さは1.5mに達せず、枝は横に這いつくばり、まるで盆栽のような状態であった。そして、幹や枝の殆どは、粗皮がガサガサ、この生育障害、まさしく「いぼ皮病」そのもので、これでは樹は大きく成長できず、生産力もまったく劣り、金もとれないモモづくりに陥っている現状が目に入った。

しかしである。モモ畑の下を見ると、全面に中国料理には欠かせない「チンゲンサイ」が植栽され、冬場の収入源となっていた。対応した農家の話だと年によってはモモより下の野菜の方がお金になるとのこと。転んでもただでは起きない中国農民のしたたかさを垣間見た次第である。

2回目は、山梨のモモの花が咲き始めた今年の3月29日からとなった。上海のモモは、山梨と同様にピンクの花が咲き出した生育となっていた。今年は過去に例をみない大雪の影響で約1週間の遅れとの説明があった。花そのものは正常であったが、咲き方は力強さが感じられず、すぐにでも散ってしまうような弱々

しいものであった。3日間、現地のどの畑に行っても錦松のような荒肌のモモの木ばかり。「いぼ皮病」を解決しないことには、上海・南汇区のモモ5,500haに将来はないことを痛感した。

3回目の予定は7月下旬。上海のモモの成熟期である。あの樹姿で、どのようなモモがどの位成っているのか非常に興味がある。今(7月5日)予想すると、果実の大きさは150gくらい、糖度はせいぜい10度、収量は1本当り50~60果。10aだと約100本植なので5,000果、目方で800kgがいいところか。問題の収入になると、kg単価で90~100円なので、10aのモモを作って8万円の売上げが上限とみる。山梨のモモの10分の1の粗収入である。この3回目をしっかり見聞して、指導目標の結論を出したいものである。しかしながら、過去2回の経験から、人民政府のお役人は、モモ振興に異常な熱意をもっているが、当の農家の衆はいたってのん気で問題意識を持ち合わせていない。欲はある

が、これが昔からのモモの木で、この程度の果実で十分という答えが返ってくる。お役人と農民のミスマッチを解消することがモモ振興の第一歩ではないだろうか。

結びに、我々メンバーも、これから3年間は彼等の面倒をみるわけであるが、指導した結果が大吉とでて質・量とも立派なモモづくりが可能になると大変な事態が起こる恐れが脳裏をかすめる。

中国大陸は、広大な農地があり、数限りない農民がいる国である。数万、数十万haのモモが、7月、8月の旬の季節に日本に向けてドサッと津波のように入ってくると国産モモは危機的状況が発生する。

国際協力、日中友好とはいえ、常に日本のモモ農家のことを頭に入れ日本農業に軸足をおきつつ、上海に足を運びたいものである。

(前山梨県総合農業技術センター所長)

